

1、

久森信幸はどこか途方にくれた、諦めの入り混じったような顔で自分の今の姿を見下ろした。制服は埃まみれになってしまっていて、黒い学ランがうっすらと白くなっている。おまけに所々、靴跡のようなあとまでついてしまっているのは、つい先ほどまで信幸を取り囲んでいた同級生や上の学年の人間によるものだった。

これが初めてでないことは明白で、もっと正確に言ってしまうと、いつものことだった。

貧相な体つきに、低い身長。あまり自己主張をしない性格。その要素の何かしらが、あるいはその全てが彼らの反感に引っかかったらしい。最初は単純だった。物がなくなったり汚れた状態が出てきたり、あるいは、根も葉もない噂話であったり。けれどそういうものは、その内立ち消えると思っていたのである。

人の噂も七十五日とも言うし、その内きつと飽きるはず。

ところがそうではなかった。時間が経つにつれ、状況は悪化していった。最初は「進学校なのに」だった。今となっては「進学校とはいえ」である。教師は所詮人間でしかなく、生徒もまた人間でしかない。掲げられた《自立・敬愛・勤勉》なんて本当に実践している生徒がいるかどうかとも怪しい。そこまで考えて、信幸はため息をついて少し視線を上げると、人影が見えた。

すぐ目の前に内履きのつま先が見えて、固まる。そっと視線を上げると、黒いタイツが見えた。男子ではなく女子だと認識しても、ほんの少しだけの安堵を得ただけで、それがクラスにいる女子グループのリーダー格だったら、という嫌な想像が頭を掠めていった。

「……大丈夫？」

信幸が想像していたことは杞憂に終わった。その声は聞いたことのない人のものだった。クラスにいても聞いたことがない。大人しい子はいたが、その子とも恐らく違うだろう。そんな子は自分に話しかけたりはしないはずだ。そう結論を出し、ゆっくりと視線を上げていく。

ほっそりとした少女だった。制服を着崩すことなく、きちんと着込み、髪型も肩よりも上に切られた黒髪で、いかにも模範生徒、といった雰囲気少女。内履きには緑のラインが入っていて、同学年であることがわかった。

「誰、ですか」

「ナツメトワコ。季節の夏に目、永遠に子どもの子って書くの。……久森君、だよ」

相手からの問いかけに信幸は首を少しかしげ、まじまじと少女を見上げてしまう。ナツメ、という苗字には聞き覚えがない。クラス名簿を思い出すが、やはり見た覚えがなかった。

「……あの、えっと」

口ごもる。困惑したその様子に、その少女は、ああ、と納得したような声を上げた。

「クラスメイトじゃないよ。……同級生。私は2年C組。久森君は2年A組。でしょ？」

「なんで、僕のこと、知ってるの……？」

信幸が聞くと、「だって」と永遠子は苦笑いする。

「よく聞くし、見かけるから。久森君のこと」

返ってきた言葉に、どうしようもないほどの居たたまれなさに襲われてうつむく。恥ずかしさよりも何よりも、情けなさのほうが上回った。それはつまり、彼女が自分自身が置かれている状況を理解しているということであり、そしてそれが周囲に当然なこととして知れ渡っていることに他ならない。

「大丈夫？」

笑われるのだろう、と覚悟していた信幸の耳に届いたのは、しかし嘲

笑でもなんでもなく、案じる言葉だった。

「う、うん……大丈夫、夏目、さん……」

どこか怖気づいたような、それでいて拍子抜けてしまったような声が出た。

「ねえ、あとで一緒にご飯食べない？」

「え……？ あの、なんで？」

反射的に疑問が口から出た。初対面で、別のクラスの、それも女子からの突然の誘いなのだから、無理もない。

「なんでって。私もよく一人で食べるの。でもなんだか最近味気なくて。他の子はグループ作ってるし、混ざりにくくって」

「で、でも、さっき見てたでしょ……僕と一緒にいちゃ、だめだよ」

なんとかそれだけは避けなければいけないとするが、目の前の永遠子と名乗った少女は小首を傾げた。

「大丈夫。私に任せて」

淡く笑う。そのんんでもないであろう表情に釘付けになった。

2、

二人が出会って一年が過ぎた。三年生だった上級生は卒業し、二年生だった上級生もまた最高学年となり、信幸にかまう余裕はなくなっていたが、同級生はそうはいかない。表面上は平穏さを保っていたが、水面下では相変わらずだ。そんな中ではあったが、だからだろうか、信幸にとっては永遠子の存在は大きくなっていた。彼女の傍にいれば、手を出されることはなく、本当に大丈夫だったのである。有り体に言えば、救われていた。

「何か…騒がしいね」信幸が不思議そうに呟くと、永遠子は、ああ、という顔をし「亡くなったんだって」と続けた。

「……誰が？」

「用務員さん、って聞いた」

信幸が永遠子の顔を見た。「用務員さん」「そう」「あの、噂の？」

「噂？」「その、なんていうか……」口ごもる。そんな信幸を永遠子はじっと見ている。

「あの用務員の人、その、いつもじろじろ女子生徒を見てたって。あっあの、別に聞いてたわけじゃなくて、聞こえてきて。結構大きい声だったからつい……」

たじろぐ信幸の様子に永遠子は軽く笑う。

「大丈夫だよ。それ、有名な噂だったから。私も知ってたの」

「なんだ」内心胸を撫で下ろす。「変な誤解されたらどうしようって思った」

そうやって苦笑いをする信幸の首には白い包帯がのぞいている。

少し前、どうにも耐えられなくなって切ったものだった。それを知った永遠子は信幸を準備室へと引っ張って行き、こう言った。

「自殺なんてして、周りの何かが変わるの？　変わらないよ。びっくりするくらい何も変わらない。いじめた子たちは最初はしおらしくするけれど、それだって大人の目がないところでは元に戻るよ」

冷ややかな目で永遠子は信幸を見下ろす。冷ややかな声で、続ける。

「『あいつ死んだのかよ、つまんねーな』って言って、後は笑ったり恋をしたりして生きていくの。そうして誰かと結婚して、子どもが出来たりしてすっかり忘れてく。ずっとずっと大人になってから同窓会で、『そういやあんなやついたっけなあ』とかなんとなく思い出したって感じで言われるだけで終わっちゃうの」

信幸は呆然と、異質なものを見るような目で永遠子を見上げた。目の前の同級生が、同じ人間ではないような、そんな錯覚に眩暈を覚えた。目の前の少女は、本当に自分が知っている目鷹永遠子なのだろうか？

「ねえ、そんなの悔しいって思わない？」

「やめてよ」

「なんのために死んだんだろうって思わない？」

「やめて」

「僕の死はこの程度だったんだなって空しくならない？」

信幸はとっさに耳を塞ぐ。そんな彼を見下ろし淡々と続ける。

「久森君、あなたに、そんなこと、耐えられる？」

一言一言、子どもに言い含めるような口調で、けれどもそれは突き刺すように響いた。いつの間にか信幸は泣いていた。

「大丈夫だよ、久森君」

永遠子はかがみこんで、そっと信幸を抱きしめる。

「ここは私たちだけの場所。こんな場所には誰も来ない。来ても鍵がかかってるもの」

細腕を信幸の首に絡め、そ、と顔を寄せる。信幸の体がかすかに跳ねる。

「何も心配なんていない」

だから大丈夫なの、と永遠子は信幸の白い耳朶に囁く。詰襟からのぞくかすかな傷跡を撫で、陶醉した表情で言い聞かせる。

「言ったでしょ？ 私と久森君は同志なの。私はあなたの味方だよ」

「君は、」

一体なんなんだ。かすれた声で信幸は続ける。

「夏目永遠子。あなたの同級生で、味方で、たった一人の同志だよ」

呆然と座り込む信幸の目をのぞき込んで、出会った時と全く同じように微笑んで言った。

「秘密とルールを守れば天国よりもっと良い場所にいける。それを教えてあげられる人。」

ぼうっとそのときのことを思い出していると、目の前に手をかざされて、ひらひらと振られていることに気付いた。

「ねえ、聞いてた？」

少し不満げな永遠子の声に、信幸は慌てて、ごめん、と小さく謝る。

チャリ、とかすかな音を立てて、永遠子の手の中から鍵が現れた。手の平の大きさと同じくらいの少し大きめの鍵。ところどころ錆びていて、使われていないことがそこからも分かった。

「これ、どこの鍵だと思う？」

いたずらっぽく訊ねる永遠子に、信幸はいささか気後れする。

「……わ、わかんない」

「学校の裏に少し高い山があるでしょ？　その一番上の、奥まったところにね、古い小屋があるの」

何を言わんとしているのか、信幸には理解が出来た。

「これ、この鍵、それにそんな建物だってどうやって……どうして……」

「それは秘密……なんてウソ。冗談。鍵はたまたま見つけたの。ほら、中庭の片隅に、物置のスペースあるでしょ？　その奥にかけられてたの。ずいぶん古いし、使われてるようでもないから、もらってもいいかなって」

再び手の平に収め、背中に隠すような動作をしてから、楽しそうに永遠子は言う。

「もらってもいいかな、って……」

少しばかり呆れたような様子で信幸はつい口にしてしまう。些細なものであれ、規則違反という単語から程遠そうな認識が強かっただけに、まさか永遠子がそんな真似をするとは思っていなかった。それを察したのか、永遠子は苦笑する。

「この鍵を持ってることを知っているのは、私と久森君だけ。二人だけの秘密だよ」

「秘密……」

「そう、秘密は大事なもの。そしてルールも。あとは、わかるよね？」

永遠子の囁き声に、信幸は無意識のうちに頷いていた。

3、

外からかすかな雨音が聞こえてくる。じっとりとした暑さの中、信幸は読みかけの本を片手に、窓の外をぼうっと眺めていた。季節は巡って、梅雨。信幸は三年になっていた。

学校の校舎を生徒が行き来している。どこか気だるげな空気の中、信幸はただ一人、取り残されたような心持ちでいる。

夏目永遠子が行方不明になったのは、半年ほど前。

特に不審な行動も何もなく、部屋はきれいに片づけられ、彼女だけが忽然と姿を消した。何があったのかのメモも痕跡も何もない。あんなにも長い間一緒にいたのにもかかわらず、信幸には永遠子がどこにいるのか、見当がつかない。どうしているのか、何をやっているのか。そうして考えを巡らせてやっと、信幸は彼女の何も知らないことに気付いたのである。残ったのは、彼女に関する噂だった。

曰く、彼女は用務員の男とも関係していた。曰く、真面目な人間のふりをしていて実はひどく不真面目であった……。なぜそんな噂が立ったのかは後になって分かった。至極単純なもので、いわゆる、蛙の子は蛙、というものだ。

そんなはずはない。そんなことはない。けれど確かめたくなくなってしまって、以前教えてもらった住所を見ながら永遠子の自宅へと向かったことが一度だけあった。地図を見ながら進み、何度か電柱の番地を確認ながら進む。

辿り着いた先にあったのは、廃屋のような家だった。良くないこととは思ったが割れた窓から中を覗き込む。人がいたという形跡はあった。けれどあったのはそれだけで、朽ちかけたような鍋や雑誌や、そういったものが転がっていた。

予想外の光景に、信幸は呆然と立ち尽くす。これは、何かの間違いだ。そう思って何度も紙と住所を確認し、通りかかった人にも聞いた。わかったのは、この住所は確かに彼女が教えた住所で間違いはないということだけ。人は住んでいたようだがよくわからない、ということだけだった。

——彼女は確かにいたはずなのだ。自分の目の前にいた。髪の毛の匂いも、肌の温度も、あのどこか甘い、柔らかさは声も、確かに記憶にあるじゃないか。

「秘密とルールを守れば天国よりもっと良い場所にいける……」

それは彼女の口癖だった。思い返す。何度も何度も繰り返されたその言葉を。そうか、と理解した。彼女は天国よりも良い場所へ行ったのだ。幸せの在り処へ辿り着いた。

彼女の信仰と宗教は既に、信幸の中に根付いている。

いつか必ず逢える。自分もいずれ、そこへ行くのだから。